

ひまわりからの メッセージ

19号

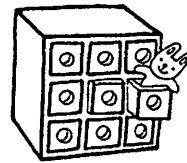
2012.10.9.

西農園城
発達障がひ支援センター
ひまわり

発行人: 中野みこ

子育ての

マニュアル



最近、療育や教育にたずさわっている人から「指導のマニュアルをください」と言う人が多くなつて……と聞くことがある。お母さん向けの話をしても「散歩のときには子どもにどんなことはきかけたらいいですか」とか、「どの様に遊んだらいいのしょう」と聞かれることも多くなつて、少々とまどっている。

学校には、なるほどカリキュラムが存在する。一年生で何を教えるかが決まっている。しかし、特別支援教育では、個別指導計画や個別の教育支援計画をたてて実践していくことの必要性が言われているのではなかっただろうか。療育の場でも同様に一人ひとりの子どもの個

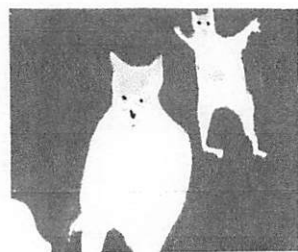
別計画が義務づけられている。

私たちの仕事は、まず目の前の子どもを理解することから始まる。お母さん方も、自分の子どもを分かろうとする親としての思いからスタートするのではないのだろうか。一般論で語るのとは簡単だが、目の前のその子に対してどうするかということは、決して「先にマニュアルありき」ではないのだと思う。

ただ、基礎知識として私たちは、やはり子どもの発達を知っておきたいと思う。子どもたちの体や感覚・運動がどのように発達するのか、ことは、認知はどの様に獲得されるのか、そういう基礎知識の上に一人ひとりの子どもの困り感や特性の理解が加わっていくのである。とは言え、発達について私自身がまだまだ勉強中である。だから、お母さん方も、その親子にとってのよりベターな方法をさがっていくことしかできないのである。

手取り早くマニュアルを他人から教わろうとする人は子どもの育ちにかかわる仕事には不向きなのではないだろうか。子どもは日々成長し、変化していく。常に子どもたちに向き合いたいと私は願っているのだが……。

「アール・ブリュット」からの 連想



先日、偶然に大垣駅でKさん親子に会いました。Kさんはダウン症で、現在は作業所で、やはり織をしてくいて、その色彩感覚にはすばらしいものがあります。油絵を習っているとのこと、その帰りだということでした。

今日、帰宅すると、以前に勤めていた京都府豊岡の松花苑みずのき寮から封書が届いていました。そこには、「みずのき美術館」の開館記念展の案内状が入っていました。そして、「日本のアール・ブリュットについて語る」というタイトルがついていました。

「アール・ブリュット」って何？、知っていらっやいますか？、その案内状によると、アール・ブリュットとは、

「第二次世界大戦後、価値観の再編成が行われる中、フランスの芸術家ジャン・デュビュッテによりつくられた言葉、日本語に訳される場合には、「生(き)の美術」「生

(なま)の美術」とされることが多い。伝統的な美術教育を受けていない作り手によって制作されるそれらの作品は、美術史的な枠組では解彩しつくすことができない。イギリスの美術史家ロジャー・カーディナルは、「アウトサイダー・アート」と訳している。」と書かれていました。

私は以前、この「ひまわりからのメッセージ」に、白色のクレヨンで絵を描いていた青年のことを書いたことがありましたが、その青年が暮らしていたのが、みずのき寮という入所施設でした。

みずのき寮には、その後、プロの画家の指導が入るようになったとのことでした。

みずのきの人たちの作品は、ローザンヌにあるアール・ブリュット専門の美術館に収蔵されているそうですが、パリで「アール・ブリュット・ジャポネ展」が開催された際には出品されなかったそうです。プロの画家の指導が入った作品は、「生の美術」とは見なされないということなのかもしれません。

先日出会ったK君の作品も、とてますばらしいのです

が、「アール・ブルツト」として認めてもらえないのかしらと、ふとKさんの顔が目の前まよぎりました。

遠い昔のことですが、Mちゃんという自閉症のお子さんに会いました。出合った頃のMちゃんの興味は、丸い物を回すこと、缶のふたも、車のおもちゃのタイヤも、とにかく丸い物が大好きでした。もう一つ好きだったのは、おもちゃの電話で、ボタンを押すと、「おはあちゃんよ……」と家族の音が聞こえてくるもの、そして後の一つは粘土の固まりでした。

人の顔など全く見てくれないMちゃんとの遊びは追いかけてから始まりました。追いかけてつかまえたう、ギョッと抱きしめて体をぐるぐる回したり、高い高いをしたり……とにかく、私という人間を意識してもらおうとこころがうスタートです。彼は、追いかけて遊び(彼にしてみると、追いかけられ遊びですが……)に疲れると、指導室に戻ってきて赤いスポーツカーのおもちゃと、電話を手にします。赤いスポーツカーをぐるぐる回して、ひっくり返して、タイヤをくるくる回す、電話器のボタンを押すと、又、走り去ってしまいます。こぼれないMちゃんが、どの位の

理解力なのかもわかりません。どこを突破口にした方がいいかと考えました。

ある日のこと、Mちゃんをつれて散歩に出かけてみました。散歩途中で見たものを突然言ったり、看板の字を記憶してきて帰ってから書く子どもたちも知っていましたので、Mちゃんの反応が見たかったです。黙々と歩いて帰ってきたMちゃんには何の変化もありませんでしたが、散歩に出る時に手にしていたはずの丸いふたを手にしていませんでした。ところが、一週間後、別ルートを歩こうとする私の手を引っぱっていく彼に従ってみると、一週間前と同じルートをたどり、何と丸いふたを手にしたのです。その時に私に投げた笑みの一瞥が、はじめての彼との共有の世界でした。

方向を正しく認知しているということは、頭の中に図が描けるということです。私が最初に彼に作った教材は、赤いスポーツカーと電話器と同じ大きさの写真カードでした。実物と写真が同じ↓写真による絵合わせへと進むのに、そして時間はかかりませんでした。

そして、そのうちにセラピーボール(大きいのでしゃが

むと大人の姿がかくれます)を使ったかくれんぼ遊びが大
のお気に入りになつて「バアー」という発語が出てしまし
た。

彼のもう一つのお気に入りの粘土は、こぶしのような固
まりに一本の角のようなものがくつつくようになり、その
形を前後に動かして外の世界をながめることが多くなりま
した。木々の葉が風にそよぐ様子も、空の雲も、その粘土
のすき間を通して片目で見る世界の面白さは私にはわか
りませんでした。同じ形を作つて楽しんでみたものでし
た。確かに両眼で見るとは違つて視覚刺激としての楽
しさがあつたのでしよう。

何故Mさんのことを長々と書いてきたかという点、彼
はその後粘土の形から文字をおぼえ、高等部で陶芸
を学び、実家の喫茶店で使うコーヒーカップなどは全
て彼の手作りというように、幼児期の好きなものに成人し
てからの生き甲斐にも結びついていったケースだからです。
Mさんの場合は、アートというのかどうか分かりませんけ
れど……。

「
好きなおことを

していれば良いのではない！」

こうして書くところじゃあ、幼児期から好きなことをさせ
ておけば良いのだ」と考える人がたくさんいらっしゃるま
す。残念ながら保育園や学校の先生の中にもいらっしゃる
ようですよ。

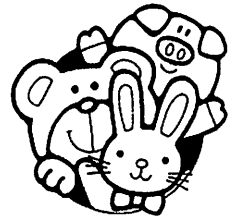
しかし、Mさんも好きなことだけをやってきたわけでは
ありません。人とかかわりもコミュニケーションのとり方も
人と折り合いをつけることも、認知の力も育てられてき
ました。思春期のむつかしい時期には、毎日のマラソン
が彼の日課でした。マラソンの途中に彼の好きなお店に
入つて品物をひっくり返すというふうな出来事もあつた
のでした。日常の生活の中で幼児期から一つ一つ積み上
げてきたこと、支援が引きつがれてきたことの大切さを
私はMさんの育ちの過程の中で感じていきます。

もちろん、KさんにもMさんにもそれを支えてきたご両
親の努力があつたことは間違いないのでしよう。

検査は

「子どものために」

利用するもの



検査のことは以前にも書きましたが、お母さん方や先生方の中にも、就学判定のためにだけ使われるかのように誤解する方があるので再度述べたいと思います。検査には様々な検査があり、各々の特徴があります。お子さんの発達の段階を知るものとして、**発達検査**と**知能検査**があります。

発達検査…… K式発達検査、津守栢毛式発達

検査、遠城手式などがあり、主に

発達指数(DQ)で表されます。

知能検査…… 開発した人の名をとってビネー式、ウ

クスラー式といわれるものがあり、どれ

も知能指数(IQ)で表されます。

ビネー式検査は一つの値で表されるのに対し、ウクスラー式は、個人内差

を見るために使われます。

知能検査は精神年齢÷生活年齢×100で表すので、六歳の子が六歳の精神年齢であれば100となります。平均は90〜100と考えるといいでしょう。ビネー検査は、定型発達のお子さんにとって知的な発達やゆっくりであるお子さんを見つける目的で作られています。子どもの発達には個人差があっても、発達がゆっくりなお子さんの場合には、年齢が上がるにつれて知的発達の差は他の定型発達のお子さんに比べて次第に広がってくると考えられています。ですから、IQによっては、そのお子さんが定型発達のお子さんの発達にどう作られているか、教育課程で一斉に学ぶことが、その子にとって多大な負担になると考えられる場合に支援学級を勧められるというケースがあるのです。

ところが近年になって、発達のアンバランスさをもつ子どもたちが目立つようになってきました。そして、外からの情報のとらえ方も各々にちがうことも分かってきたのです。耳からの情報をどのようにとらえているのか、視覚情報がどの様にとらえられているのかを知ることも、子

どもたち一人ひとりを大事に見ていくという視点から大切であることがわかってきたのです。

ウェクスラー検査は、そういうアンバランスなもつ子どもたちの困っている部分をどのように支援していけばいいのか、様々な分析をするように作られています。今まではWISC-IIIと違って、五歳から十六歳までの子どもに適用するウイスク検査の三版を使っていました。今回四版が新しく作られたので、今後はWISC-IVへと切りかわっていくと思います。

四版の分析は、より細かくなりましたが、今、心理士に関して国家資格化が進められており、今後は心理士でないと検査できないということになっていくのではないかと思われます。

(現在、心理士はまだ国家資格ではないのです。)

いずれにしても、検査は、子どもたちのために役立っていくものでなければ意味はありません。ご家族もお子さんの認知特性を知って、今後の参考にしていけるようなものであってほしいと思います。

もちろんウェクスラー検査が全てではありません。お子さんの困り感を知るためには、他の検査も併用して分析していく必要があります。

お母さんの中には、数字にこだわり、低い値が出ると、まるで自分の育て方がいけなかったのだと過敏に反応される方や、数値を上げるために受験勉強のように、内容を知って練習させようとする方もいらっしゃいます。そんなことをすると、お子さんがどんな所で困るのか、正しい資料にはなりません。数値が高ければいいということではなく、個人内差を見る検査であるということも、しっかり理解しておかれることでしょう。そして結果よりも、検査をしている時のお子さんの様子や検査のプロセスの中に、家庭でやるべき課題も見えてくるのです。検査を通して、又、一緒に考えていきましよう。

お知らせ



十一月の例会は、十一月十三日(第二火曜日)

九時三十分